京都大学新聞

学生団体
京都大学新聞社
京都市左京区吉田
京都大学構内
京都　(771)8111(学内2441)
(761)2054(直通)
振替・京都3909

号外

住所が決ったらすぐに！

毎週月曜日

京大のメディアをお届けします

奇形化され虐げられた受験生活を経て、なおも消し去ることのできぬ自らの全面的な発展をいま新たに学生としての出発から発溂として意欲される新入生諸君にとって、京都大学新聞（週刊・一部二十円）の定期購読は、必要不可欠なものです。

京都大学新聞は、学生新聞のうちでは、数少い週刊制を維持し、毎号六頁平均の紙面を読者に提供しています。その内容は、ニュース、評論、ルポルタージュ、研究論文、芸術評など幅広く、それぞれの領域で読者の厚い信頼をかちえています。また、京都大学における唯一のマスメディアとして創刊以来四十六年の伝統の継承とその発展のなかで、現在では、学生のみならず全国の労働者、市民の間にも多くの読者を獲得するに至っています。

紙面の概容は下欄にて紹介しますが、新入生諸君にはとくに、われわれの新聞活動の成果として現在的な到達点を集約的に表現した昨年十二月の一五〇〇号記念特集号を無料でお届けし読考を期しています。一五〇〇号によって紙面の各領域に総体的に貫かれたわれわれの視点は了解いただけると思いますが、しかし、京大新聞のすぐれた意義はとりわけ日々激動する学内・社会動向のなかで週を追って発行し、それぞれの課題にリアルな問題提起を行うことにあるといわねばなりません。新入生諸君には、下宿など住所が決り次第、定期購読の手続きを急がれるようおすすめします。三月二十七、二十九日の身体検査および四月十二日の入学式の当日には会場での受付けをも行います。

また、編集部では、新入生からの紙面に対する批判と漸新な問題提起などを通した紙面の豊富化と、学生としての共同の発展を期待しています。とくに新入生との相互討論の機会を準備し、積極的な編集活動への参画を待っています。

お支払い方法

毎週、自宅または下宿にお届けします

購読料（郵送料一五〇円を含む）

一年間	七〇〇円
二年間	一三〇〇円
四年間	二三五〇円

◆お支払いは、添送の振替用紙（郵便振替京都三九〇九）、または現金書留にてお願いします。

京都大学新聞社
京都市左京区吉田　京大構内
TEL　〇七五—七六一—二〇五四

活動の歴史と現在

京大新聞の沿革

■大正十四年、京都帝国大学新聞として故佐々木惣一郎博士を部長に創立。

■昭和初年、半月刊から旬刊、ついで週刊発行に移る。このころからすでに、取材、編集活動は学生だけの手で行なわれており、学内唯一のメディアとして、独自な活動を展開していた。

■滝川事件（昭和八年）などに顕著に見られる戦前・戦中の言論・表現に対するファシズムの弾圧の嵐の中も、当時としては先進的であった「真理の探求、学術の進歩、反戦自由」の主張を曲げず発刊を守り通す。

■戦争中、敗戦直後の混乱期にも発刊を続け、昭和三十一年、一時『学園新聞』と変名されていた呼称を千号を機会に『京都大学新聞』として、名実とも京都大学唯一のメディアとして確立され、現在に至る。

■現在、全国の学生新聞としては最多発行号数の千五百十二号を数え、学生存在という共通の基盤に根をもちながら、現代日本の文化的、思想的、政治的状況に鋭いメスを入れ、表現活動を通して根源的な問題提起を大胆に展開し続けています。

■また、四十五年十二月、京大で開かれた全国学生新聞連盟（全学新）第二十五回大会で、委員長校に選出され、全国の組織化の中軸となっています。

現在の活動内容

通常号発行

（毎週月曜日）

○商業新聞の主張する「客観点視点」の幻想性を打ち破る、共通の存在構造の認識に裏打ちされた視点からの漸新、正確なニュース・解説。

○日本を含めた全世界史的規野という広義な意味での〈状況〉及び、京大における様々な運動が創りあげた文化、政治状況の中から必然的に出て来た問題意識に対応する各種論文・ルポルタージュ・報告。（原稿は学生・現場労働者・知識人に渡り広く依頼しています）

○書評・映評・近着雑誌・新刊紹介など、書籍、映画などの紹介、批判的検証。

○こくばん・ことばの現象学・争鳴・複眼時評・スポットライトなどのコラム。

特集号企画

○新入生特集号・受験生特集号。その他状況に応じて特集。

懸賞小説

毎年広く全国の学生から募集、今日の文化的貧困状態を克服すべきものとして積極的に宣伝、募集をしています。なお、選者としては井上光晴氏、高橋和巳氏にお願いしています。

縮刷版の発行

京大新聞の紙面と活動を歴史的に伝達するため、大正十四年から昭和四十五年まで、創刊以来の全紙を六巻に分けて発刊。今年二月、ついに完結しました。現在、第二期刊行にむけて準備をすすめています。

出版活動

六十九年、京大闘争の渦中で「京大闘争」（三一書房）を編集、今後、パンフレットを含めて数々な形式で積極的に出版活動を推進するつもりです。

その他の活動

○各種講演会・ティーチイン・シンポジウムの企画（紙面化も含む）

○コミューン実行委員会の構成団体の一つとして積極的に参加しています。

最近の記事内容

◆ルポ・中国／京大訪中グループ（十月十九日号、二十六日号、十一月二日号、九日号）

◆〈存在〉の解放に向けて／コミューン10・11月学生委員会（十月十九日号、二十六日号）

◆仏ゼネストの拡大と限界／インタナツィオナーレレヴォルツィオーン誌より（十一月二日号）

◆隊友反戦討論会／元陸海空自衛隊員（十一月十六日号、三十日号十二月二十八日号）

◆パリ通信・ふたたび燃える炎／本紙パリ特派員（十一月三十日号）

◆いま解体しつつあるものは何か—非演劇的演劇論の試み／菅孝行（十二月二十一日号）

◆進行する破防法体制とは何か／横川勉（一月十一日号より連載中）

◆沖縄ルポ・噴出する階級的エネルギー／編集部（一月二十五日号、二月一日号、二月八日号）

◆ゴーデスベルグ綱領への道—帝国の国民統合運動と総評・社会党分裂期の労働者運動／有田越郎（一月十一日号）

◆ルポ・日産車体闘争／編集部（二月八日号、十五日号、二十二日号）

◆四国ルポ・地域開発の中を／編集部（二月二十二日号より連載中）

◆靖国問題について／ナイトコミューン事務局（二月七日号）

◆急使—演劇戦線／和田耕治（三月一日号より連載中）

◆三里塚ルポ・この土地はわがものにあってわがものにあらず／編集部（三月一日号より連載中）

◆アピール・新病棟移転阻止への最終局面をむかえて（三月一日号）

◆その他、入管、反軍、三里塚などをめぐる特集企画やルポ。

◆書評、映評、雑誌、パンフの紹介など。

◙ニュース

10・21鮮烈な突撃、政府打倒へ（十月二十六日号）／教養部政治スト（十一月九日号）／沖縄「国政参加」選挙粉砕闘争・現地報告（十一月十六日号）／入管闘争の全国的結合を（十一月二十三日号）／全学新第二十五回大会（十二月二十八日号）／授業料闘争、教養部代議員大会流会（十二月二十一日号）／入管行政との対決を（一月十九日号）／コザ決起に騒乱罪適用さる（一月十一日号）／東大決戦二周年（一月二十五日号）／沖縄闘争、2・4をステップに（二月一日号）／文学部、農学部など、闘いの炎あがる（二月八日号）／二月十二、十三日文学部実力スト（二月十五日号）／医学部長室占拠、新病棟移転阻止へ（二月二十二日号）／三里塚長期決戦に突入（三月一日号）ほか。

◙今後われわれが、学内、学外で当面する諸課題への徹底的な取り組みを追求するつもりです。さまざまな視点からの問題提起や投稿などをお寄せ下さい。

久野　収（哲学者）

情報が巨大な支配的イデオロギーに管理されつつ自己増殖を繰り返していく現代に生きる人々は、その情報に自らの主体性を委ねています。「商業紙」や「商業放送」が、「中立・不偏」を掲げ「客観性」を主張して氾濫させている報道や論評も、過去に対する事後追認とはなりえても、私達が日々展望すべき未来を拓くものでは決してないといえましょう。

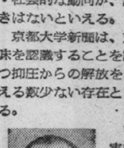
京都大学新聞が、このマス・コミの論理を打破し、また学生新聞にありがちな自己満足的な閉塞性に陥ることなく、つねに現実のなかに未来をつかみとり、学生のみならず広く労働者、市民に鋭い問題を提起しようと努力していることは高く評価できると思います。

また、私は京大在学時代から三十数年来の読者ですが、このほど刊行された「京都大学新聞・縮刷版」は、学生が辿りついた昭和史としてさまざまな貴重な資料を得ることができ、喜んでいます。

おすすめします

「激動の70年代」と呼ばれる時代を迎えて、現在ほど、日々の政治的・社会的な動向が、諸個人の現実的な運命を決定づける意味で重大なときはないといえる。

京都大学新聞は、支配権力による政治的・社会的な攻撃の本質的な意味を意識することを読者に可能ならしめる存在として、また現体制のもつ抑圧からの解放を目指して闘われている諸々の闘いの実態を克明に伝える数少ない存在として、ますますその意義が重要なものとなっている。



もとより、リアルな現状認識はそれ自体、自らの現実的な行動の指針をも含むものである。この点でも京都大学新聞は、つねに諸々の現実に対する原則的かつ現実的な指針を明らかにし、情況を切り拓く鋭い問題提起によって、読者の信頼をかちえている。

井上　清（歴史学者）

「第二新聞」策動に対する　われわれの見解

京大では昨年から日共系学生による「第二新聞」でっちあげの策動が繰り返されており、四月には、学内情勢に不案内な新入生諸君の前に、「京都大学学園新聞」を名乗って登場せんとしている。

われわれは、彼らの策動の本質を諸君に明示するために、この間の事実経過と、彼らへの批判の視点を提出しておきたい。言うまでもなく、対立はそれぞれの紙面の内容の豊富さと鋭さによって淘汰されるべきものである。1面に掲載した京大新聞創刊以来の活動内容、ならびに同封した一五〇〇号記念号によって、われわれの活動の概容が伝えられるであろう。

自立的な学生新聞に対する、日共系学生の破壊行為は、全国的に展開されている。六十八年十二月の立命館大学新聞社に対するのっとり策動は、テロリズムとデマゴギーを中心とした暴虐きわまるものであったことは記憶に新しい。

京大においては、昨年、「京大週報」なるタブロイド版の新聞が、一時期、発行されていたが、まったく大衆化せずに挫折。その後、「新聞研究会」という名称で、「第二新聞」の準備がすすめられていた。

昨年、行なわれた「同学会選挙」において、日共系学生（全学連連絡会議）は、「民主的学生新聞の創刊」を政策にかかげた。そもそも、この「選挙」は、昨年六月に、闘う学生から、学生大会の開催要求署名をつきつけられて逃亡し、崩壊していた「執行部」の選管が告示したものであり、規約による六月改選を、半年も遅らせて行なわれた全く不当なものであった。また大衆的な選挙粉砕、ボイコット行動の中で、この「選挙」が、定足数に達したなどとはとうてい、考えられない。（したがって、新入生諸君は、この同学会「執行部」に対して同学会費を払い込む必要は全くない。不当な徴収は強く糾弾されねばならない）

「選挙」後、一月九日、「同学会代議員会」が開かれた。十日付の「新聞局設置決まる！」という新聞研究会のビラによると、「代議員有志から提出された『新聞局設置に関する提案』を審議し、満場一致で採択した。」とされている。そしてこの「同学会への新聞局設置」を、「新聞研究会」は「真に七、八割の学生を結集する同学会運動を発展させるもの」として、積極的に参加すると表明している。この一連の策動は、「第二新聞」を何とかして、「民主的」粉飾をこらした形で出発させようとする努力なのであるが、同学会「執行部」そのものの、宗派性が明らかになってしまっている以上、茶番劇にしかすぎないだろう。

十七日、「同学会新聞局」名で、「編集員の募集を十八日～二十日の間、行なう」との「告示」が出された。

ところが、二十六日、突然、「京大学園新聞社」名のビラがまかれ、次のようにいうのである。

「京都大学学園新聞社は、同学会代議員会で設立を決定、準備委員会のもと、編集員を公募して、一月二十一日、正式に発足しました。現在、新聞社は四月創刊をめざし、鋭意準備中です。」

誰でも、気がつくことであるがこの十日間のうちに、「同学会新聞局」から「京大学園新聞社」への名称のすりかえが行なわれたのである。「同学会新聞局」では、あまりにも宗派新聞としての性格が明確になりすぎると考え、われわれ、京都大学新聞社と名称を類似させて、一般うけをねらったものと思われる。（同学会「執行部」が全学生から遊離していることに対して、非常に自覚的ではある。）何がなんでも一刻も早く、御用新聞をつくらねばならぬと、あせったため、醜態が生じてしまったのであろう。

このようななかで、一月二十八日、「同学会『執行部』の『民主的新聞』の非民主性を糾弾する」という、H・M君（ⅡA）、Y・O君（ⅡJ）連名のビラが出るにおよんで、「編集員公募」というこれまた「民主的粉飾」が、みごとに剥がれてしまった。M君、O君は、「同学会新聞局」に応募し「政治主張の違い」で不採用にされた。しかも「応募者」は、この二名だけだったのである。（もっとも「準備委員」であり、かつ「新聞研究会」のメンバーである民青同盟員の諸君が編集にあたることが前提されており、同盟員以外の学生が「応募」するなどとは全く考えられていなかったのであろう。）

これらの破綻を、とりつくろうため、「準備号」では、「代議員会で決定されたのは、設立委員会（また変わった！）で、その第一回総会で『京大学園新聞』と名称を決定したのだ」とお粗末な「統一見解」がでている。

彼らは、その準備号で、「京大新聞社に対する態度」として、①全共闘運動の押しつけ、②事実報道における不正確さ、の二点を批判していくとしている。このような中傷はわれわれ自身の運動ー紙面を再度つきつけることによって完全に粉砕されるだろう。

彼らの「学新運動論」については、以下にその現状批判を掲載したので参照されたいが、自由購読制・独立採算制のわれわれ京大新聞社に対して、同様のたてまえを持つかのごとき粉飾をこらして、日共・民青に忠実な宗派新聞を発行することを画策したのが今回の第二新聞策動である。「京大週報」ー「新聞研究会」ー「同学会新聞局」ー「学園新聞社」と右往左往する彼らの醜態を暴露するとともに、彼らのいわゆる「七、八割を結集する同学会運動」の惨めな破産の現実をつきつけてやらねばなるまい。諸階層のエネルギーを即自性に固定化したままの囲い込みを続ける日共の宗派運動に対して断固たる追撃を与えるべく、戦列の先頭にたって闘うことを表明しておく。

破産せる没時代的路線

―日共「学新論」の現状批判―

学生新聞運動の歴史的過程と理論的系譜を検証するなかから、われわれはここで日本共産党ならびに民青同の「学生新聞」活動の現状批判とその全き破産を明らかにしておきたい。われわれの批判の射程が、単純に学生新聞論のみにあるのではなく、その文化論ひいてはその革命論に及ぶのは当然のことである。

日共の学生運動論、学生新聞論を今日、まことに細々としたものではあるが、「組織的」に推進しているのは「全国学生新聞連絡センター」（以下、センターと呼ぶ）を称する団体である。中心的に参加している学生新聞は、横浜市大・大経大・北海学園大・立命館大の「第二」などであるが、全く当然のことながら、学生運動の過去・現在を通じての拠点校においては、ほとんど学生新聞運動を展開しえていない。簡単な事例を挙げれば、教育の帝国主義的再編とその矛盾の噴出が最も早く、しかも顕著に現われる「マンモス大学」とくに首都圏の私立大学において、彼らの学生新聞はただひとつも存在しないのである。それは彼らの運動がいかなるエネルギーに依拠しているかということの論証である。（もちろんこの事実は、われわれの担ってきた学生運動、学生新聞運動の波及の不十分性として総括されるであろうし、京大新聞社は全学新（全日本学生新聞連盟）の先頭に立ってこれを克服する努力を続けていることを付言しておきたい）

全学新の歴史からみれば、センターは彼らが六〇年代の闘争の地平において急速に右翼化し、全学新から放逐されるとともに形成されたものであり、学新運動と闘争の連関のなかで完膚なきまでに粉砕された特別教宣部隊論ーサーキュレーション論にしがみついた部分なのである。

しかも救い難いことには、七一年に突入した今もって、特別教宣部隊論の道具主義的・技術的継承とサーキュレーション論のだき合わせでもって、この京大において、醜悪な没時代的かつ反革命的な方針＝「第二新聞」策動を行なうとしているのである。特別教宣部隊論とは、端的にはレーニンの「全国政治新聞」論（『何をなすべきか』参照）の単線的応用であり、革命党ー労働者・人民の図式のなかにそっくり位置づけられる。われわれが日共の学新論を指して、その技術的継承だといったのは、日共自体の非プロレタリア党化の故である。つまり、生活防衛→住民運動におけるエネルギーの小市民的固定化と軌を一にした、学園における学生のエネルギーの非プロレタリア的議会政党へのかこい込みの「道具」としての学生新聞論であるからである。

われわれは、レーニンの「全国政治新聞」をすぐれて時代的であり、かつ強力な戦略性をもつものと評価する。同時に、学生大衆の組織化に日夜苦闘した特別教宣部隊論の創出者（戦後草創期の学生運動家ー学新編集者）たちの衝迫と情熱に敬意を払うものである。特別教宣部隊論の根底的止場の理論構築をわれわれは全学新第二十五回全国大会議案書として提出しているので、ここでは割愛するが、その基軸は、学生存在の階級性の分析と協働的存立構造の抽出にある。

彼らが言う編集方針ー学生生活の総体を包括し、その中にある意識、行動、生活、闘争を紙面に反映させ、学生全体の共通認識を形成していくーが、六全協の直後に日共内右派（構造改革派）によって提起された、かの悪名高き「ダンスも、マージャンも」というサーキュレーション論そのものであることは、火を見るよりも明らかである。同盟の労働組合運動の方法と画するものは何なのか。日本資本主義の帝国主義的再編ー近代国民体制の確立に対する闘いとは、いかなる位相で提起されるものなのか。ここに至っては、マルクス主義の根本的否定以外の何ものでもない。（もっとも日共「新」規約の「先進的実行」ではあるが）

ところで、センターは「早大・慶大・中大・法大などのマンモス私大、京大・阪大・九大などの国立大などの新聞は歴史的蓄積も古く、かつあまりに強大な力をもっているかの印象を与えるが、しかし現在、『全共闘』一派を新聞会（局・社）から放逐していく闘いが緊急になっている時に、学生新聞民主化（「のっとり」と読め！）の闘いを大きく大胆に展開していかねばならない」との位置付け（七十年七月、センターによるシンポジウムの報告）のもとに、「のっとり三つの方法」を厚顔にも提起している。すなわち、

①全員購読制かつ自治会の多数派である場合…多数の支持のもとに新聞会員をリコールし、編集員を公選化する。

②自由購読制・独立採算制の場合…新たに新聞を発行する。

③小規模の大学、女子大など…新聞会に加入し、全共闘派を放逐する。

「京大学園新聞」は、彼らが「最も困難」と自認する②に該当するものであり、センターの内部でも「成功例なし」という有様である。

われわれは周知の通り、昨年十二月十二日から三日間、京大において全学新第二十五回全国大会を先進的学新運動を担う全国六十数校の新聞とともにかちとり、全共闘運動の総括に立って新たな学新運動論を確立、《革命的分学》を基軸とする学新運動の新たな地平への突入を宣した。

われわれは、十年も前に破産した学新論に右翼的にしがみつき、かつ学生存在の階級的エネルギーに敵対して、帝国主義的秩序のなかの小市民的自然成長性を固定化せんとする日共の学新運動を決して許しはしない。同時に、全学新運動の圧倒的な昂揚が、全国各大学の学新運動を発展・豊富化している現状を報告して、彼らの愚しい策動の決定的破産を予言しておく。

京都大学新聞　縮刷版　全六巻

好評発売中!!

■大正一四年創刊号より全紙を収録
■各巻A4判　レザークロス装、金文字入、索引、年表付（御希望の方に詳しい案内のパンフレットをさし上げます。）
■定価　全巻揃　一五〇〇〇円　各巻分売　二八〇〇円（御注文または御照会は郵便でお申込み下さい。）

京都市左京区吉田本町京大構内
京都大学新聞縮刷版発行委員会
TEL　075―761―2054
郵便振替　京都　3909

激動の昭和史を語る

第一巻（大正一四年四月～昭和九年三月）京大事件から、吹きあれるファシズムの嵐に抗して。
第二巻（昭和九年四月～昭和二〇年三月）日中戦争、第二次大戦、そして学徒動員
第三巻（昭和二〇年四月～昭和三〇年三月）敗戦。天皇御幸事件、学園レッドパージ。
第四巻（昭和三〇年四月～昭和三七年三月）第二滝川事件、警職法闘争から六〇年安保へ。
第五巻（昭和三七年四月～昭和四二年三月）大管法阻止闘争、沈滞から日韓・ベトナム反戦の激発へ。
第六巻（昭和四二年四月～昭和四五年三月）羽田闘争―山崎君の死から、京大闘争、七〇年安保の闘争昂揚。